（様式４－２）

整理番号５

行政支援情報

相馬地区底びき網の 2024 年漁期の操業位置の特徴

福島県水産資源研究所　資源増殖部

部門名　水産業－資源管理－底びき網

担当者　伊藤貴之

Ⅰ　新技術の解説

１　要旨

相馬地区の沖合底びき網漁業者は、福島県地域漁業復興計画に基づき、計画的な水揚量拡大に取り組んでいる。漁獲量を増大させるための効率的な操業を支援するため、操業日誌をもとに 2024 年漁期と 2023 年漁期の操業位置を整理し、両年の結果を比較した。2024 年漁期は、2023 年漁期に利用頻度が低かった宮城県海域や、浪江～広野沖の水深 150～200m 海域における曳網時間が増加していた（図 1）。2024 年漁期は秋にスルメイカ、冬にヒラメ、春以降にアオメエソが漁獲の主体となっており（図 2）、季節ごとに漁獲の主体となる魚種を変え、漁場を変化させたことで、漁場の拡大が図られたと考えられた（図 3）。

（１）操業日誌の情報を用いて、相馬双葉漁業協同組合相馬原釜地区の沖合底びき網漁船の 2023、2024 年漁期（漁期年：9 月～翌年 6 月）の操業位置を整理した。漁期全体及び 2 か月ごとに、緯度経度 5 分目ごとに曳網時間を色分けしてマップ化し、操業位置を比較した。

（２）2023 年漁期は、9、10 月は水深 150～200m でヤリイカ、サバを主体に漁獲していたが、11 月以降は浅海域での操業が増加し、水深 100m と 200m の海域に分かれて操業していた。３月以降は浅海域でヒラメ、スズキの漁獲が大幅に増加した。（図 2、3）

（３）2024 年漁期は、9、10 月は水深 200m 付近でスルメイカを主体とした操業が行われ、1、2 月は水深 100m 付近でヒラメを主体とした操業が行われていた。3 月以降は相馬～広野沖の水深 150～200m でアオメエソを主体とした操業が行われたことから、2023 年漁期と比較して浪江～広野沖での曳網時間が増加した。（図 2、3）

２　期待される効果

（１）水揚量拡大に向けた漁場利用の参考となる。

３　適用範囲

（１）漁業者、行政関係者、研究者

４　普及上の留意点

（１）操業海域は年によって変わるため、継続的なデータ整理と発信が必要である。

（様式４－２）

整理番号５

Ⅱ　具体的データ等

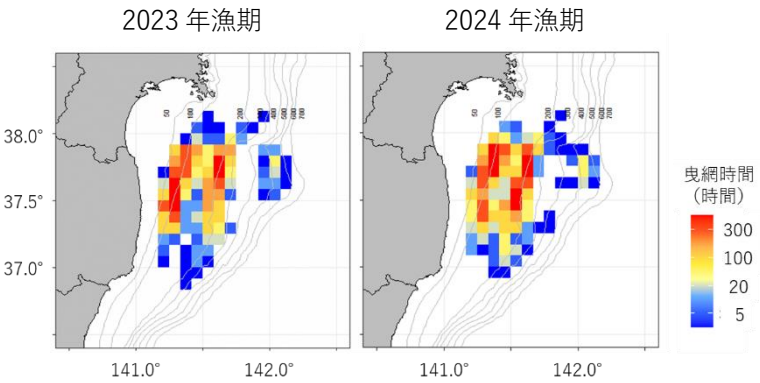

図１　漁期年別曳網時間の分布

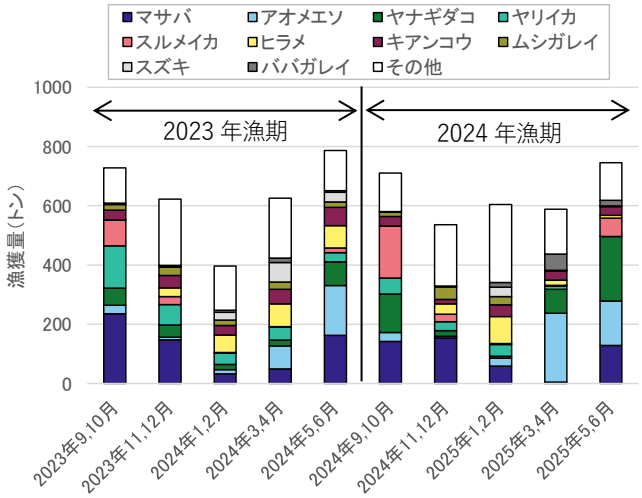

図２　相馬原釜地区沖合底びき網漁業の魚種別漁獲量（2 ヶ月ごと）

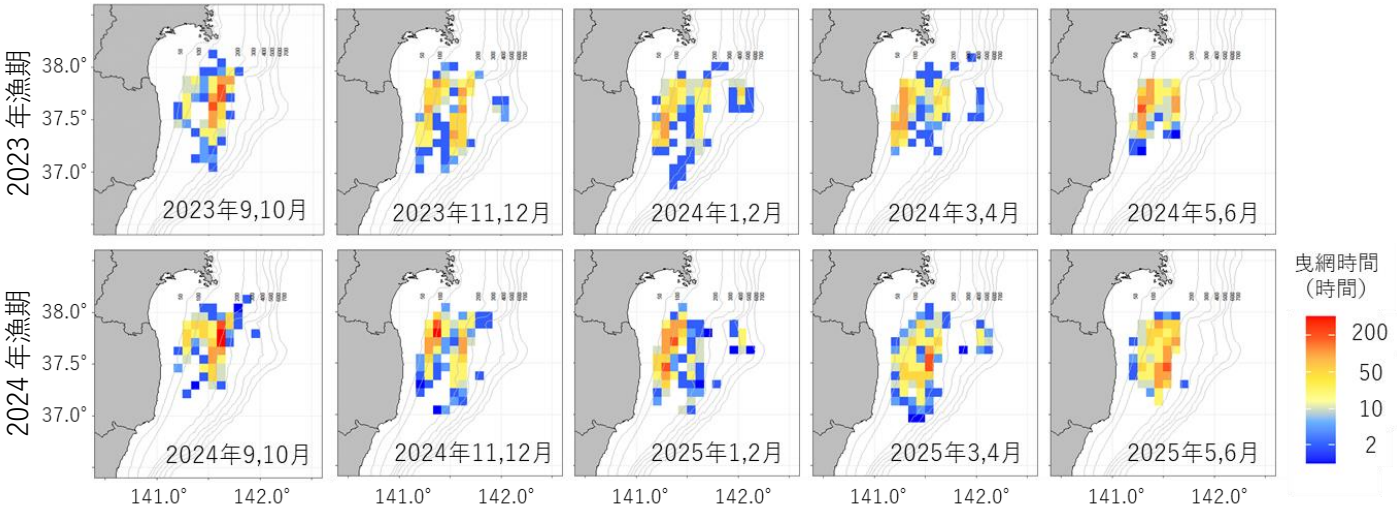

図３　漁期年別、月別曳網時間の分布

Ⅲ　その他

１　執筆者

伊藤貴之

２　成果を得た課題名

（１）研究期間　　令和 3～令和 7 年度

（２）研究課題名　　カレイ類資源管理手法の開発

３　主な参考文献・資料

なし